

# 図書館だより

北海学園大学附属図書館報 第27巻2号(通巻174号) 2005.7.11

vol.27

NO. 2

Bulletin of the Hokkai-Gakuen University Library

安武秀岳

## 2 『ニューヨークタイムズ』 がやって来た

森下宏美

## 3 ゴールドスマス=クレスライブラリーのこと

大平義隆

## 4 ライラックの花の下で読書はいかが

寺島壽一

## 5 結局、図書館が早い

山下晴康

## 6 図書館の思い出

## 7 図書館レポート 2005

## 8 図書展示企画No.43 高倉新一郎文庫展 編集後記

# 『ニューヨークタイムズ』 がやって来た

[2005 January]

文=安武秀岳

(やすたけ ひでたか/人文学部教授)

2005年1月から北海学園大学の図書館で航空便のニューヨーク・タイムズが読めるようになりました。喜びのあまり、ニューヨークでの学問的青春時代を回顧したくなりました。1973年9月1日、強い日ざしの真つ昼間に、ニューヨーク市34丁目でケネディー空港からのリムジン・バスを降り立った時、目くるめく思いでした。生まれて初めて現場でのアメリカ史研究を始めるだとの思いで、実際、少年のような期待と不安を覚えました。それから一年半、素晴らしい友人や歴史家に出会いました。しかしニューヨークタイムズとの出会いは、私にとってこれらの幸運にも決して勝るとも劣らぬものでした。当時、日本の図書館で航空便のニューヨークタイムズを読むことなど思いも及ばぬことでした。

それから一年半、私のニューヨークでの毎日はニューヨークタイムズとともにありました。歴史の本を読まない日はあっても、タイムズを読まない日はほとんどありませんでした。勿論、名キャスター、ウォーター・クルンカイトが司会する、夕方6時のCBSテレビの報道番組も私のアメリカ理解を深めてくれましたが、タイムズから得たものに比べれば無に等しいものでした。ニューヨークの知的な人々の最も重要な話題の一つは、タイムズが何をどのように報道したかです。例えば、私がよく出席したエドワード・ペッセン教授の歴史の講義では、しばしばタイムズ記事に対する論評から始まりました。今朝のタイムズによれば、だれそれが憲法修正第1条の本

来の意味についてこのような発言をしたが、それはこれこれこうゆう理由で誤りであると語った後、彼は予定の講義に入りました。好奇心の強い学生は改めてタイムズのその記事を読むことになります。

昔からニューヨークはアメリカではない、と言われてきました。これは真実です。しかも誇り高いニューヨーカーは、中西部や南部の平均的アメリカ人と同一視されることを好みません。米国には朝日・毎日・読売のような、いわゆる「全国紙」もありません。その意味では『タイムズ』はニューヨークという都市の地方新聞にすぎません。したがって、この新聞はアメリカ合衆国の世論を代表しているものではありません。むしろ多数派世論の動向に配慮しながらも、つねに権力と多数派世論に向かって批判的立場を堅持してきた実績が高く評価されています。そのため、全世界の知的指導者たちは、最も信頼できる最も高度で豊富な知的情報を提供しているものとして、この新聞の報道に注目してきました。近年、彼らはまず、電子情報で検索しているようですが、この情報の紙面の文脈を確認するために、やはり最後は現物を参照しています。

なお、あのヴォリュームの多さで、ニューヨーク観光名物にもなっている「日曜版」も近々、わが大学のどこかで購入されることになっているとの情報もあります。ホームステイ・アメリカ留学も結構ですが、ニューヨーク・タイムズに目を通すほうが、ずっと安上がりの実り豊かな勉強が出来ます。

# Goldsmiths'-Kress Library



## ゴールドスミス＝クレスライブラリーのこと

文＝森下宏美

(もりした ひろみ／経済学部教授)

図書館書庫のエレベーターで最下層まで降りると、細い通路の壁際に、ねずみ色の鉄製のキャビネットが置いてある。その中には、イギリス古典派経済学を研究している私にとって、この上ない宝物ともいえる資料が収められている。それは、Goldsmiths'-Kress Library of Economic Literature, Segment 1と名づけられた、約2,000本のマイクロフィルムである。このマイクロフィルムには、1400年代から1800年までに出版された経済学関係の書物が、約3万タイトル記録されている。ちなみに、1801年から50年までの分はSegment 2(約3万タイトル)として出されていて、北大の経済学部図書室に収蔵されている。この2つを利用すれば、古典派時代の経済学文献のほぼ全てを読むことができるのである。

そもそもこのマイクロフィルム集成は、2つの大学にあるコレクションをもとに作られたものである。ひとつは、ロンドン大学にあるGoldsmiths' Library、もうひとつは、ハーバード大学のKress Libraryである。前者は、かつてロンドンで繁栄した金細工人(Goldsmith)のギルドが収集した書物のコレクションであり、後者は、ペンシルバニア出身の実業家、C. W. Kressの収集になるものである。

彼らがもたらしてくれた恩恵は計り知れない。歴史家の川北稔氏が、「わが青春のゴールド・スミスライブラリー」という一文を書いている(『大阪大学図書館報』Vol. 35 No. 1 June 2001)。マイクロフィルム化される以前の1972年に、川北氏がGoldsmiths' Libraryを訪ねた際、そこはアフリカ人の若い歴史研究者たちがあふれかえていたそうである。アフリカの植民地が

次々と独立を達成し、アフリカ人が自らの歴史を復元しようとしたとき、その史料は、とりわけ大西洋奴隷貿易の最盛期であった18世紀の史料は、イギリスかフランスにしかなかったわけである。

そこでのアフリカ人研究者たちとの出会いの意味について、川北氏のエッセーはまだまだ続くのだが(無論、そちらの方がおもしろいのだが)、Goldsmiths'-Kress Libraryと私の出会い(もちろんマイクロフィルムでの)について少し。約20年前、『資本論』関係のマルクスの草稿を共同で翻訳する仕事を始めた際、マルクスが引用している全ての文献に直に当たり、その異同を確認するという方針がたてられた。そこで知ったのがGoldsmiths'-Kress Libraryの存在である。文献リストを片手にカタログで文献を探し出しては、該当するページを1枚ずつコピーし、照合するという作業を繰り返した。そのときの「成果」は今も研究室の書棚の4段分を占拠している。数年前に、マルサス人口論争と「貧民の被救済権論者」について本を書こうと思ったとき、目指す文献があるかどうか、カタログを恐る恐る開いてみたが、期待は裏切られなかった。いま、マルクスが1863年5月から6月に書き残した抜粋ノートの編集を共同で手がけているが、そこに抜粋されている約170の文献の99%はこのライブラリーで読むことができる。

カタログを眺めていると、当時の社会・経済問題をめぐる言論の様子が生生きと伝わってくるようである。数百年間にわたる夥しい文献を後世に伝えようとした先人の思いに接すると、それらは単なる「過去の」書物とは思えなくなる。

# ライラックの花の下で 読書はいかが

文＝大平義隆

(おおひら よしたか／経営学部教授)



2004年撮影 十二軒通り

札幌の町が一度に訪れる春の花に覆い尽くされているとき、ひととき心を浮き立たせる花の香りがある。それはライラックの香りだ。今年で3度目の香りを私は楽しんでいる。

私は神奈川県生まれだ。高校の友人が札幌の大学に行ったと知り、ある時彼に印象を聞いた。すると、「雪の季節が長いので、ススキノはいつも明るく安全だ。そして、春は短いすがばらしい。横浜ではこんなに春を感じたことはなかった。」と答えた。私自身初めて札幌を訪れたとき、印象に残ったのは、観光でまわった大通公園だった。札幌の中心街にどっかりと座り込む大通公園は、うっそうとした大木と、花壇には花々が植えられており、自然を楽しむ贅沢がこの町にはあるんだと感じた。町中に北海

道らしさを見つけたような気がした。

3年前に赴任し、初めての5月に、どこからか流れてくるすばらしい香りに驚いた。町全体が包まれているのだ。180万の都市が、ライラックの香りに包まれる。私は、鼻をククンさせながらその花を探した。住まいのすぐ横にその木があった。花自体今までにも見たことがあったので名前はすぐにわかった。

昨年までは午後には授業が集中していたため、家までで大通で地下鉄を降り、午前中ベンチで本を読むことができた。明るい日差しの中で乾燥した軽やかな空気とライラックの香りに包まれ本を読んでいる。いやいやなんという幸せ、贅沢なんだろう。このためだけに、札幌にでて来る人がいたっておかしくはない。

図書館だよりも、何を書こうか悩んだが、赴任して三年たった札幌の印象になってしまった。赴任したばかりだとんでもよく感じてしまい、その後は印象から消えることの方が多いなかで、この花の香りは、札幌にいることの喜びを今年も与えてくれている。組織に長くいればだんだん慣れてきてしまう。そうすると、客観的な目線も、図々しい発言も少なくなり、システムとしてはあまりいい人材とはいえなくなってしまうかもしれない。だいたい、そうしたことを日頃学生には話しているのに、自分のこととなると心許ない。しかし、この花の香りが漂う頃だけは、赴任の時を思い出すことができている。



# 結局、 図書館が早い

文=寺島 壽一

(てらしま としかず／法学部助教授)

研究者を志して大学院に入学しても、そもそも、あるいは、どこに就職口を得られることや、先行きは分からない。首尾よくどこかの大学に専任教員として採用してもらえたとしても、自分の専攻・研究テーマに関連して必要な文献が、その勤め先の附属図書館なり資料室に所蔵されているとは限らない。むしろ着任したその時点では、自分にとって必要な文献の多くが所蔵されていない、というのがほとんどであろう。しかも、主観的には“どうしても必要”と思える文献を揃えるに足りるだけの研究図書費を配分してもらえる、という保証もあるわけではないし、授業の準備に最低限必要な文献にしても、発注してから自分の手許に届くまでには、当然ながらそれなりの時間を要する。本来の専攻・研究テーマに直接関わる専門書以外にも、いろいろと目移りのする私にとっては、主観的に“どうしても必要”と感じられた文献（といっても、そのように感じたのは錯覚だった、と後になって思う場合も多々あるのだが）のジャンルの範囲が広がったこともあり、結局、経済的に可能な限り、自腹でなるべく本を買っておこう、と考えた。

問題は、定期刊行物・専門雑誌の類である。法学部（ないし法律学科）が設置されている大学や、そうでなくても、法律学の専任教員がいる（または自分が着任する直前まで前任の法律学専任教員がいた）大学であれば、その附属図書館には、法学研究者にとっては欠かせない主要な定期刊行物——『最高裁判所判例集』、『判例時報』、『法律時報』、『ジュリスト』など——はひとつおき揃えられているはずであるが、そういうところに就職できるかどうかもわからない。『最高裁判所判例集』は結構値が張る上に、瞬間に書棚のスペースを埋め尽くしそうだったので、これを自腹で買うのは断念したが、それ以外の上記法律雑誌は自腹で定期購読することにした。ここまでは法学研究者の多くがたどるパターンであり、それで終わればまだよかったが、私を待ち受けていた大きな罫がさらにあった。「講座物」である。前述のように目移りのする私にとって、法学分野以外の各種「講座

物」であっても、その誘惑には、しばしば抗しがたいものがあつた。こうして私は何枚もの「定期購読カード」を持つ羽目になる。

いったん自腹で本を買出すようになると、大学に就職してからもなかなかその習慣から脱却することができなくなる。研究者仲間である私の友人にもこのような人は多い。それらの仲間との間で最近話題になるのが、「本を買うことよりも本の置き場のスペースの確保の方にお金がかかる」ということである。もはや研究室には本を到底収容しきれない状態に至った友人もいて、住まいの床の補強が話題に上るほどである。

私の場合、本学に赴任したのは昨年であるが、前の勤め先は住まいから遠く、午後8時を過ぎると帰りの交通機関の便が急に悪くなるという事情があつた。自家用車を持たない私は、仕事を家に持ち込んでしまうことになつたが、本を何冊も抱えながら勤務先と自宅を往復するのも辛い。研究室の書架もしたいに研究図書費で購入した本で埋まっていったため、勤め先よりも自宅に近い書店で私費購入した本の置き場は結局、自宅になつた。しかし、やがて自宅の書棚も埋め尽くされたものの、なかなか整頓の暇も見つからず、新たな書棚を買うまでのつなぎと思いつつ、段ボールに入れっぱなしという状態に陥つた。結果は、法律雑誌の必要な号をそのつど段ボールの中から引っぱり出すのに時間を費やしてしまう、というものであつた。本学に赴任して通勤が遙かに楽になつた今も、自宅に（も）置いておきたい本の選別・雑誌の整頓は思いどおりには進捗しない。かくて「結局、大学の附属図書館に行ったほうが早い」と思う私がここにある。

# 図書館の 思い出

文=山下晴康

(やました はるやす/工学部教授)

大学に入って図書館に自由に出入りできるようになったことにある種の感動を覚えた記憶がある。やたらに休講する文系の先生には、こちらの腹づもりが狂うと思うよりも有難いという気持ちが強く、しめたこれで続きが読めると感謝した。分けのわからんつぶやきもどき講義を聞かされるより、同じ分野の著作を読むほうが考える材料提供としてよほど面白い。どうせ理系に来たのだから、今のうちに人文、社会科学の本を乱読しておくのも悪くないなどと勝手な理由をつけてもいた。他にも本代をケチる理由もあり、奨学金とアルバイト収入を効率的に使う必要もあった。大学に行ってもいいが、食わせるだけは出来る、しかし他は期待しないでもらいたいという約束もあった。2年の初夏にもなるとそろそろ理系らしく数学でもやっておかないとならんかな、好きな生物はどうも食べそうにもないし、理に行くにしても工に行くにしても、まずは偏微分方程式でも勝手に勉強しようかと考え図書館にある本を引っ張り出してみた。ところが、これが帝大以前の年代物で、旧漢字と片仮名ばかり、でもまあいいや数式が時代が変わる訳でもなしと読み始めた。時には借り出して読みふけた。結構勉強にはなったが、当時の図書館は夏に暖房付きで暑い、長い計算は余計熱くなる。おまけにあまり古いせいか、読んでいるうちに次第に紙が膨れて厚みが増えることに気が付いた。よーし終わったと返却する頃にはずいぶん厚い本だった。私がついトコロテと書いてしまうのはそのころの名残らしい。

当時の大学はいい加減な大雑把分類学で理類の学生が行ける学部学科はあり過ぎるほどあった。おかげで結構悩んだ。図学の先生から強く精密工学科を勧められた。君の描く図は機械向き、曲線描きがいいとか、誉められたせいか一瞬考えた。修士まで行けば何とかするとも言われた。その意味も分かって

いた。立体幾何として興味を持ったのは確かだし、機械も好き、電気も好き、本音は生物もっと好き、でも食えない、お金はないし、4年で就職しないとまらない。結局断った。図学(立体幾何)は、湯川秀樹に決定的転機をもたらしたことで知られている。正確には京大の立体幾何担当教授が偉過ぎたというべきか。結構面白い学問である。立体(3次元)を約束にしたがって平面(2次元)に描き出すのだが、思考過程をきっちり表現できるところが面白い。図書館で本も読まず、虚空を見ながら図学の問題解法を考える。辿り着けば定規、コンパスを使って一気に紙に書き付ける。出来上がったところ見計らったようににじり寄って来て教えろと小声でせがむ常連(大声で言わない図書館での常識はあったようである)もいた。教えなければトイレでもついて来る。五月蠅いので教えるが、その後で全く別の解法を考える。図書館は静かに考え事するにはいい場所であった。

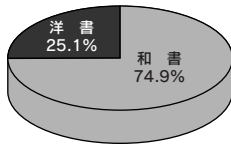
化学はPaulingの本を読んでも感動もせず、教養の学生実験も定性・定量分析まで全て高校時代の復習だった。進学校出身者は嬉々としてやっていたが、物理も生物も実験は全部が復習だった。学部ではもう少しましな実験が出来るか、将来食っていけるかなと思い、物理に行こうかと考えた。後に分かったことだが、図学の先生が声をかけた5人の学生は一人も工系に行かなかったと嘆いていた。物理は訳本で勉強することが多かったが、意味の通じない訳には閉口した。図書館で原著をめくると一瞬で解決した。当時始まったばかりの高圧実験物理に興味を持った。試料作成法の文献調べに図書館に通い、独語の文献が出て来るとしようがないかと読み、仏語の文献には辞書を片手に目を回して読んだ。読んでみたら関係がなかったときのハイご苦労さんも図書館の楽しみ方の一つであった。

# 図書館レポート 2005

## 蔵書冊数 (2005年3月31日現在)

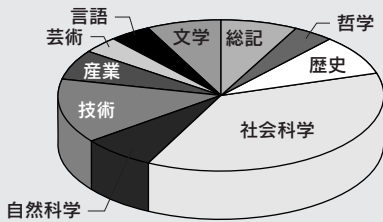
	和書	洋書	合計
蔵書冊数	553,117冊	184,953冊	738,070冊

ちなみに2004 (H16) 年度の1年間の受入図書冊数は、28,654冊でした。学術雑誌は、9000種を超えるタイトルを保管しています。



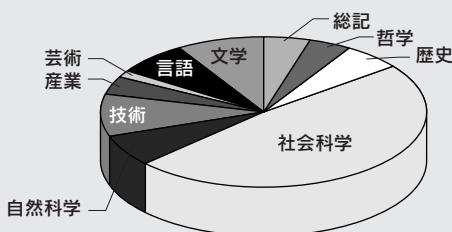
### 【和書】

000 総記	42,213冊	7.6%
100 哲学	22,254冊	4.0%
200 歴史	47,746冊	8.6%
300 社会科学	204,936冊	37.1%
400 自然科学	40,653冊	7.3%
500 技術	76,409冊	13.8%
600 産業	35,467冊	6.4%
700 芸術	19,788冊	3.6%
800 言語	22,663冊	4.1%
900 文学	40,988冊	7.4%
計	553,117冊	100%



### 【洋書】

000 総記	8,434冊	4.6%
100 哲学	7,847冊	4.2%
200 歴史	10,792冊	5.8%
300 社会科学	89,508冊	48.4%
400 自然科学	12,491冊	6.8%
500 技術	16,814冊	9.1%
600 産業	7,160冊	3.9%
700 芸術	2,692冊	1.5%
800 言語	13,169冊	7.1%
900 文学	16,046冊	8.7%
計	184,953冊	100%



## 一カウンター・サービス関係統計一

	2002年度	2003年度	2004年度
入館者数	461,006人 (1日当り1,628人)	439,823人 (1日当り1,517人)	405,999人 (1日当り1,440人)
貸出者数	延べ37,630人 (うち学生 34,979人)	延べ34,147人 (うち学生 29,421人)	延べ36,771人 (うち学生 25,384人)
学生一人当りの貸出回数	4.0回	4.0回	4.1回
貸出冊数	64,657冊 (うち学生 58,346冊)	56,553冊 (うち学生 46,271冊)	46,493冊 (うち学生 35,632冊)
学生一人当りの貸出冊数	7.3冊	6.6冊	5.2冊
PCブース利用者数	延べ 3,864人	延べ 4,272人	延べ 3,145人
AVブース利用者数	延べ 1,844人	延べ 3,638人	延べ 3,515人

## 一レファレンス・サービス関係統計一

### 【学内での調査】

	教職員 (前年度対比)	学生 (前年度対比)	合計 (前年度対比)
文献所蔵調査	39件 ▲1件	49件 ▲50件	88件 ▲51件
事項調査	10件 +5件	16件 ▲21件	26件 ▲16件

### 【学外に調査依頼・学外からの調査依頼】

#### ●複写業務

	国内向け (前年度対比)	国外向け (前年度対比)	合計 (前年度対比)
学外に依頼	461件 +169件	30件 +17件	491件 +186件
学外から依頼	193件 + 43件	0件 ▲ 2件	193件 + 41件

#### ●貸借業務

	国内向け (前年度対比)	国外向け (前年度対比)	合計 (前年度対比)
学外に依頼	151件 ▲34件	9件 ±0件	160件 ▲34件
学外から依頼	69件 ▲22件	0件 ▲1件	69件 ▲23件

#### ●文献所蔵調査

	国内向け (前年度対比)	国外向け (前年度対比)	合計 (前年度対比)
学外に依頼	23件 ▲11件	0件 ±0件	23件 ▲11件
学外から依頼	15件 ▲16件	0件 ±0件	15件 ▲16件

### 【学外者利用者数および本学関係者他利用者数】

学外者数	32人	他館利用者数	70人
------	-----	--------	-----

## 【図書委員】

- 経済学部 福田 都代
- 経営学部 黒田 重雄
- 法学部 加藤 信行
- 人文学部 常見 信代
- 工学部 上浦 正樹

## 【図書選定委員】

- 経済学部 千葉 頼夫 伊藤 淑子 犬飼 裕一
- 経営学部 早川 豊 福野 光輝 石井 晴子
- 法学部 加藤 信行
- 人文学部 小野寺 静子
- 工学部 上浦 正樹

# 高倉新一郎文庫展

～(1902(明治35)～1990(平成2))元本学学長 北海道史研究の泰斗・本学図書館所蔵文庫より～

高倉新一郎文庫資料

(工学部BF所蔵分) 68冊展示中

## 〔高倉新一郎(たかくら しんいちろう)先生略歴〕

1902(明治35)～1990(平成2) 北海道史研究の泰斗。北海道大学名誉教授、北海学園大学及び北海学園北見大学名誉学長。帯広で高倉安次郎・かつの長男として生まれる。札幌第一中学、北海道帝国大学農学部農業経済学科を1926年(大正15)卒業。北大の教職につき、1931年(昭和6)北海道史編纂に携わり、1932年大学司書官兼任、1945年「アイヌ政策史」により農学博士授与。1955年北大附属図書館長、1957年経済学部長など学内要職を歴任して1966年定年退職して名誉教授、同年北星学園大学教授。

1968年(昭和43)北海学園大学学長(第2代学長：1968(昭和43)～1980(昭和55))、1980年北海道開拓記念館館長兼任、1977年北海学園北見大学学長兼任、1981年北海学園大学名誉学長、1986年北見大学名誉学長の称号をうける。

学外では新北海道史総編集長、道立文書館運営協議会長、札幌その他市町村の編集長や監修、札幌遠友会長、道文化財保護審議会長、市民生協、国際交流事業など多方面の重職を担って社会的文化的活動は大きく、道文化賞・開発功労賞などを授与された。

もっとも大きな仕事は新北海道史編集及び従来の北海道史研究を整理し、幅を広げて質を高め、多数の研究者を指導した点にある。著作多数。

〔北海道歴史人物事典 北海道新聞社 1993〕より引用・編集



## 〔高倉新一郎自著〕(刊行年順)

- 北辺・開拓・アイヌ 高倉新一郎 竹村書房 昭17
- 北海道文化史序説 高倉新一郎 北方出版社 昭17
- 郷土と開拓 高倉新一郎 柏葉書院 昭22
- 北の先覚 高倉新一郎 北日本社 昭22
- 北海道史の歴史 高倉新一郎 みやま書房 昭39

他

## 〔文庫所蔵図書〕

- 小樽市勢要覧 昭和34年版 小樽市役所 昭34
- 松前町勢要覧 '78 松前町役場 昭53
- 北海道絵本 更科源蔵・川上澄生 昭30
- 夏の無カッタ北国 更科源蔵・国松登 地崎宇三郎 昭22
- 北海道映画史 更科源蔵 九島興行 昭45

他

## 編集後記

4月から5月にかけて、図書館見学という企画を行いました。

図書館見学とは、主に新入生を対象としたゼミ単位での図書館見学ツアーのことで、図書館員がOPAC(公開検索)の使用法や施設紹介などを行うものです。一昨年前に始めてからというもの、おかげさまで年々利用者は増え続け、今年は500人以上の学生さんが私どもの拙い説明に耳を傾けてくださいました。本当にありがとうございました。

北海学園大学附属図書館報 図書館だより 第27巻2号 (通巻174号)

本館 〒062-8605 札幌市豊平区旭町4丁目1番40号 工学部図書室 〒064-0926 札幌市中央区南26条西11丁目1番1号  
TEL(011)841-1161(本館内線)2273・2274・2275(工学部内線)7813・7814 印刷所:(株)アイワード